

基調講演

集まって住むってステキなこと！

—ゆるくてあたたかい新しい「きずな」でコミュニティを育てよう—

廣田 信子

I. 集まって住むってステキなこと！

1. マンションは、都市のごく普通の住まい方

「マンション」は都市のごく一般的な住まい方として定着。多くの住民が「マンション」で日々の生活を営んでいる。その中には、様々な家族の形があり、多様な価値観、個々の事情がある。終の棲家ともなるマンションでの暮らしが幸せなものになるために何が必要か、建物の維持管理という目線から少し離れてシンプルに考えてみたい。

2. マンション住民が求めるものは

マンションを購入するとき、多くの方は、そこでの幸せな暮らしを思い描いて、一生で一番高い買い物をする。一番大切なことは、自分たち家族が幸せに暮らせること。そのために、「住まい」には「安心」で「快適」であることを求める。

では、「安心」で「快適」な暮らしは、専有部分での家族の生活だけを考えれば可能か、建物のハードの維持管理だけ考えていれば可能かということ、そうはいかない。

マンションは、全体がそれぞれの「住まい」であり、「住まい」を共有する他の住民の価値観や感情、住民間の人間関係は、個々の「安心」や「快適」と深い関わりを持つ。さらに、マンションを取り巻く環境や周囲の住民との人間関係も決して無関係ではない。

3. マンション住民ってそんなに冷たい？

多くの方は、個が大切にされ、わずらわしいから解放されるというパンフレットイメージ通り、自分の家族の幸せな暮らしを描きマンションに暮らし始める。管理組合に属するという自覚もコミュニティの一員となるという意識もないのが普通である。それが、マンションにおける管理組合運営やコミュニティ形成に障害となっているといわれ、周囲への「無関心」がマンション住民の代名詞のように使われる。

しかし、周りの目を気にせず自分のライフスタイルで暮らせるということは、「安心」「快適」、そして「幸せな暮らし」の基本である。「個」が尊重されているマンションでの暮らし方に魅力を感じることに、それ自体はごく自然なことで、マイナスに考える必要はないと思う。

だからといって、ご近所付き合いをまったくしたくないと思っている人は、ごく少数のはずだ。多くの人は、自分の暮らしに踏み込まれたいくはないが、気持ちのいいご近所との関係は必要だと感じている。ただその距離感がわからない。

4. ご近所付き合いには慎重になる

マンションでは、多様な価値観を持った人たちが、縁あって突然上下左右に隣り合って暮らし始める。同じ年代の子どもがいれば親しくなるのは早いですが、単身だったり、仕事が多忙だと、きっかけがないまま時間が過ぎてしまう。

そして、ご近所付き合いの距離の取り方には、近い関係を長く続けなければならないゆえに気を使う。親しくなり過ぎたために、何かをきっかけにこじれて険悪な関係に…という例を皆、ひとつやふたつ見てきている。

いきおい、相手の事情には踏み込まないようにと、出会ったときの軽いあいさつ程度の付き合いになりがちだ。コミュニケーションの達人でもない限り。

5. 「コミュニティ」に対するイメージはよいことばかりではない

今、マンションでも、地域社会でも、「コミュニティ」の重要性が随所で語られるようになった。

しかし、「コミュニティ」に対するイメージは人によって大きく異なる。

昔は暖かいご近所付き合いがあつてよかったと懐かしんだり、それを今にも復活させようという発言をよく耳にするが、ほんとうに昔はよいことばかりだったのだろうか。

「コミュニティ」…とても暖かいイメージの言葉だが、地縁、血縁の濃い社会、同一性を求めるコミュニティは、孤独ではない反面、相互監視やしがらみ、固定した価値観の枠があつて、そこから抜け出したいと思つて「マンション」を購入した人も少なくなつたはずだ。

6. 「コミュニティ」も個人のつながりがベース

「コミュニティ」というと、最初から何か形がある集合体のように思いがちだが、あくまで個人と個人の対一の関係がベースである。それがゆるやかなネット状につながっているのが「コミュニティ」ではないか。ちょうど綿菓子のように。

管理組合、自治会、子供会、サークル活動等の一定の形がある集まりや、お祭り、餅つき大会等の行事の実施は、個人と個人の間をつくるきっかけとしての意味をもつ。「つながり」をつくるには、何かきっかけが必要だからである。

そこでは、ある程度個人の事情に踏み込んだ関係も生まれ、中心となる人たちの価値観を中心に1つの世界が形成される。時にはちょっとした人間関係のトラブルやしがらみも発生するが、それらも含めての「コミュニティ」と考えれば、確かに、そこには「つながり」がある。

7. コミュニティ形成に無理は禁物

しかし、そういった付き合い方を、すべての住民に求めるのは無理がある。価値観は多様であり、それぞれの事情もある。人とコミュニケーションをとるのが苦手な人も、そういう場に自分から出て行けない人もいる。また、一定の雰囲気が出来上がっている「集合体」が肌に合わずあえて避ける場合もある。

「コミュニティ」の形をつくることを優先するあまり、どこか付き合いを強要するような雰囲気になることは、「安心」「快適」な暮らしとは逆行するものである。

8. 単身者、高齢者の増加で「つながり」が持ちにくくなっている

では、個人の自由だからと、人とのつながりを持たない人（持てない人）がいる状況を、そのままにしておいていいのだろうか。

マンションにおいても、核家族が当たり前、単身者も増加し、高齢化、高齢独居も今後ますます増える。家族が少ないほど「つながり」のルートも狭まり、近隣との関係は築きにくくなる。それが、「引きこもり」や「孤独死」につながる。独居高齢者の孤独死が問題になるが、壮年の独居者の孤独死も実際には多い。また、乳幼児を抱えた母子の引きこもりについては、保育の現場から深刻な報告がある。NHKで放映された「無縁社会」には、地縁、血縁、社縁を持たない若者からの孤独死への不安の声が驚くほど多数届いているという。

9. どんなコミュニティでも二分の付き合いは必要

「村八分」という言葉があるが、裏返すと、社会において「お葬式」と「火事」の二分の付き合いはどんな関係でも必要とされていたということ。現代の二分は「孤独死を防ぐ」「大災害時の助け合い」と思える。人の生死に関わる場面、大きな災害時には機能するコミュニティのセーフティネットともいえる付き合いは、人間として社会に生きる以上、どんなコミュニティにも必要だと言えるのではないか。

いざと言うときには躊躇なく助けを求めたり、助けたり、異変に気づいたり、壁一つで隣り合って生活していながら、そんなことすら期待できないコミュニティは、「安心」とはほど遠い世界ではないか。ゆるくても、いざというときにはちゃんと機能する近隣とのつながり＝「きずな」はこれからの社会に不可欠である。そして、「きずな」は意識して育まなければつくれなくなっている。

10. 今の時代の新しいマンションの近隣関係とは

どんなしくみや働きかけからももれてしまう「孤立しがちな人」と細い糸でもつながっていくために、お隣同士という物理的に近い関係を見直してみたいと思う。

多様な価値観を認め合う社会では、できるだけ気の合う人と付き合いたいと思うのは

ごく普通感覚である。たまたまのお隣同士が気が合うとは限らない。

しかし、同じマンションで、隣り合って暮らすことになったという「縁」は、それだけで意味があること。普段は、さりりとしていても、いざというときは、お隣が頼りになると思えるような関係は、人が安心して暮らすために不可欠である。今はインターネット上だけのコミュニティさえできてしまうが、いざというとき頼りになるのは「リアル」な隣人だ。

「無関心」とくくられるマンション居住者だが、一人一人は、決してそうではない。大抵の人は、いざというときは近隣で助け合いたいと思っている。

しかし、それは、昔に戻るということではない。日常の助け合いを必要としない便利な社会、しかも、価値観、ライフスタイルが多様化している現代には、それにふさわしいコミュニティのあり方があるのではないか。

1.1. 集まって暮らすのは本当は安心なはず

独立性が高いのにすぐお隣に人が暮らすマンションは、プライバシーが守られながら、いざというとき5秒で駆けつけてもらえる、本当はものすごく安心な住まい方のはずである。

それなのに、マンションはなぜ、人間関係、合意形成が難しく面倒なものとして語られ、一方で、無関心や孤独死等コミュニティが育たないものとして語られるのか。

マンションの人間関係は、煩わしさも受け入れる濃い付き合いをするか、個人のスタイルを守るために周りとは付き合わないかという二極で語られるように思う。

しかし、決してそうではない。個人の生活をたいせつにすることと気持ちのよい近隣関係は両立するものだ。そのほどよい距離のとり方、気持ちよい関係の築き方がわからないために、どちらかを選択という思い込みになってしまっているのではないか。

1.2. 集まって住むことの意味を見出しコミュニティを育てる

居住者間のコミュニケーションや人間関係の「和」をたいせつに考え、「お互い様」の精神で暮らせば、マンションという集住スタイルは、決して面倒なものでも、無関心の集合体の寒々としたものでもなく、個が守られながら、人とどこかで繋がっている安心感を得られるとてもステキな住まい方だと思う。

自分たちが選択した「集まって住む」というスタイルに、マンション住民が積極的な意味を見出し、一人一人がコミュニティを大切に育てていこうという意識を持つようになればマンションは変わる。マンション住民が、芯からの「安心」につつまれ「集まって住むってステキ！」といえるような、そんな未来を作りたいと願う。

Ⅱ. 思い込みを捨て、「ことば」からはじめ、できることから行動する

1. 口にする「ことば」から変えよう

人は口にした通りの未来を体験するという。「住民が無関心だ」「お隣は常識がない」「非協力で合意形成ができない」「トラブルばかりだ」そんなマイナスのことばでマンションコミュニティを語るのをやめようと提案したい。自分たちの思い込みを変えることが第一歩。物事は見方によってまったく違った見え方をし、ちょっとしたことで人は変えられる。そのために、口から発する言葉から変えていきたい。

そして、どんなことも、他人や環境のせいにして、だめだと決め付けず、まずは自らが受け止めて前向きに知恵を働かせていけば、気持ちよいコミュニティはかならずつくれる。

2. お互い負担にならないやさしいコミュニケーション方法からはじめる

では、どうやってコミュニケーションをとり、人間関係のセーフティネットを築けばいいのか。まずは、お互いに負担にならない距離のコミュニケーションから取り組みたい。コミュニケーションが苦手な人でも、忙しくて時間がとれない人でも取り組めるものがある。

顔をあわせたときの「あいさつ」をもう一歩進めて、ちょっとした気持ちを伝え合う「カード」をつかったコミュニケーションからはじめてみてはどうだろう。

訪問や電話は相手の都合を考えたり、何か用件がないときかけがなかったりするが、カードなら、自分の都合がよいときにポストに入れられ、相手の生活を邪魔することもない。対面のように、その場で会話を成り立たせなければならないという負担感もない。それでも緩やかだけど気持ちは伝わる。私自身ずいぶんこの方法に助けられた。

3. 相手の気持ちを考えたコミュニケーションでコミュニティをハグくむ

コミュニティの中で、価値観、感じ方や事情の違いを、どちらが正しいかという感覚でとらえると、感情の対立がどんどん大きくなる。

また、同じことを伝えるにも、いきなり怒りをぶついたり、責めたりすると、相手も受け入れられなくなり、関係はこじれる。

想像力を育み、相手の立場や気持ちを察したコミュニケーションのとり方を工夫していきたい。それが、気持ちの行き違いによるトラブルを防ぎ、人間関係を円滑にする。そして、よい人間関係が築かれているコミュニティは、物事に前向きに取り組むことができ、住み心地のよさとなってマンションの価値も高める。

4. 一人一人の行動でコミュニティを変えていこう

コミュニティ形成は重要だからと、「さあ、お祭りを」、「非常時名簿を」と形をつく

ることから始めがちだが、ベースにコミュニティに対する信頼と帰属意識が育ってない段階でいきなり進めてもうまくいかない。やり過ぎて新たな不協和音が生まれてしまうこともある。一部の人だけのがんばりでは長続きしないし、外部サポートにたより過ぎたイベント実施もなかなか自立につながらない。

人間関係のベース、セーフティネットを築くために、まずは、一人一人が負担なくできる小さな取組みから始めてみてはどうか。最初は一人の行動でも、それが波及効果となって、コミュニティを大きく育てることにつながる。

5. さりげなく状況や気持ちを伝え合うことを習慣に

人は、相手と接点がなかったり、起きていることの事情がわからないと、不安や警戒の気持ちを持つ。それが続くと怒りともなる。騒音トラブルも、きちんとあいさつをし状況を伝えていれば大きくならなかつたのと思うことが少なくない。

また、近隣の孤独死に直面したような場合、見守る近親者がいないことを知っていれば気を配ったのに、自分から声をかければよかった…と近隣は心を痛めることになる。

そんなことにならないよう、普段から、さりげなく近況や気持ちを伝え合うことが、普通に行われるようになればと思う。

隣に誰が住んでいるか知らない。気づいて欲しいことがあっても伝える方法がない。…そんな状況では、ご近所付き合いに対する「不安」な気持ちは消えず、それが、「つながり」をさらにつくりにくくする。私たちは、そんな状況を変えていきたいと思う。

6. まずはできる方から、そしてみんな

「つながり」をつくるコミュニケーションは、まず得意なほうから働きかけよう。できる人には何でもないことができない人にはできない。誰かのために何かができるのはすばらしいこと。できる方から、ちょっとした心くばりを形にあらわすことで気持ちを伝え合うのがマンション暮らしの常識になる…そんな未来をつくりたいと願う。

といっても、あいさつの「カード」ですら、それまで付き合いがなかった関係では、送るのに勇気がいる。相手がどう感じるかも気になり、まだハードルは高い。それをマンション全体の取り組みにすればハードルはずっと低くなる。さらに、たくさんのマンションで取り組みが始まれば、それはムーブメントになる。最初は行動する人が1人、2人でも、それが徐々に広がり、いずれはそれが習慣になる。行動が習慣をつくり、その習慣がコミュニティの品格をつくる。それが社会全体のあり方を変える。…だから、まずは私から、そしてあなたから、できることから始めてみませんか。

マンションが、人の気持ちを察し、心を配りながら、誰かのために今自分ができていることをする喜びを学ぶ学校として機能したとき、そのときこそ、マンションという集住のスタイルが本当に価値あるものになるのではないだろうか。